



カム・バック 2009

2月15日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

すべての打ち合わせをキャンセルして朝から本を読んでいた。家族はみんな出かけてしまったし、激しい雨のせいのご用聞きも来ない。いつもは、やれ窓ふきをしてくれだの、やれテレビを見せろだのと、注文の多い二階の下宿人のばあさんも静かにしているので、邪魔するものは何もなかった。わたしはかじりつくようにして本を読んでいた。

なにしろパドマ・ジル・セントリックスの新作だ。60年代から70年代初頭にかけて国中の若者を熱狂させた、あのパドマの新作だ。あの頃大学のキャンパスではたくさんの「リエン」や「ジョージョ」がいたものだ。皮肉屋のリエン。『色彩の溢れ』の主人公。世の中を斜に眺めたような辛辣なジョークを飛ばしてばかりの嫌みな男だが、エンディング近くで明かされるリエンの唐突なまでの情熱に我々は熱狂したのだ。娼婦のジョージョ。『49の砕けた硝子片』に出てくる謎めいた少女。その言葉はいつも抽象的で意味を取りがたく、自分をエキセントリックに見せるためのパフォーマンスなのかと思ったら……。男子学生がメロメロになるのも無理はなかった。学生達が発行する文芸誌では何年にも渡ってパドマやリエン、ジョージョ、それにあの頭の弱い旧日本軍人タケル・ヤマモトやタスマニアンの生き残りアラドーについての分析が展開されていた。いやそれは分析のふりをしたラブレターに過ぎなかった、と今ならわかる。我々はみんなあの魅力的なキャラクターたちにぞっこんだったのだ。そしてパドマに恋をしていたのだ。学生に限らない。出版界においても状況は似たようなものだった。「リエンとは何者か？」「ジョージョの中の聖女と娼婦」「パドマ・ジル・セントリックスはなぜ学生達に支持されるのか」そんな特集が繰り返し巻頭を飾っていた。

そして突然パドマは表舞台から姿を消した。最後の作品『ハレルヤ！ハレルヤ！』を上梓した後、彼女は一切取材に応じなくなった。確かに『ハレルヤ！ハレルヤ！』はパドマにしてはややパンチに欠けるところはあったが、それでも我々は満足して読んだし、もっと彼女の作品を読みたいと思った。ところが次回作を待ちわびる読者の声が高まる中、三年経っても、五年経っても、新作は登場しなかった。その間、何のアナウンスもない。普通これだけ長い沈黙が続くと、いわゆるマスコミの寵児などというものは自然消滅してしまうのが常だ。でもパドマは違った。新入生たちは上級生に勧められ『色彩の溢れ』を読み、『49』を読んだ。そしてリエンに夢中になり、ジョージョのとりこになった。当時、世界の他のエリアでパドマがどのように評価されていたのかは知らない。なにしろこういう国だ。我々民衆には海外のことなんか何も知らされなかったし、恐らく当時は世界でこの国に気をかけるところなんてほんの一握りしかなかったに違いない。ずいぶん後になってからアメリカのJ.D.サリンジャーという非常に有名な作家が、人気絶頂期にやはり一切の作品を発表しなくなったという話を知って、パドマとそっくりなことに驚いたが、サリンジャー氏が世界中で知られているのに対し、我々がパドマの知名度は国内にとどまっているのが残念だった。やがて政権が交代してパドマの書籍は全て禁書になってしまった。これでパドマの名前が世の中に知られる機会はない、と誰もが思っていた。今年の4月になるまでは。

2009年、サリンジャー氏は90歳になったそうだが、パドマは確か今年で80歳だったんじゃないかなだろうか。そんな高齢になって、こうして地下出版の形をとって本を出す気になったのはなぜなのだろうか。わたしは本の中にその答を見いだそうとしたが、まだそれは見つからない。パドマの新作は、そんな高齢者が書いたとは思えないような清新な気分満ちあふれたものだ。ユニークな着想。切れ味の鋭い表現。パドマ本人の持ち味なのかりエンを思わせる皮肉味たっぷりの修辞には何度もやりとさせられた。そう。とても若いのだ。読んでいるこちらまで学生時代に戻ってしまったのかと思わせられるような文体なのだ。体制に反逆し、自由を勝ち取るためにあがき、本当に大切なもののために全身全霊で立ち向かおうとしたあの時代に。

不意にドアチャイムが鳴り、ドアノブをがちゃがちゃと激しく動かす音がした。軍事警察だ。わたしは顔から血が引いた。椅子から立ち上がった方がいいものの、一瞬、どうしたらいいのかわからなくなった。だが、すぐにあわてて本を隠した。床下に、人目に触れさせたくないものをしまう場所があるのだ。こんなものを所持していたら間違いなく連行される。カーペットと椅子の

位置を直し、仕上げを確かめ玄関に向かった。相変わらずがちゃがちゃとドアを壊しかねない勢いでやっている。チャイムはずっと鳴りっぱなしだ。誰かが密告したのだろうか。わたしがこの本を購入したことを。誰だろう。不安に思いながら中から声をかけ、ドアを開けた。

表には大柄な軍事警官が3人と、見るからに獰猛そうな警察犬が1頭いた。

「どけっ！」

わたしは突き飛ばされ、玄関脇の壁に叩き付けられた。警官はすぐに二階への階段を駆け上がり、目につくドアをみんな蹴破るようになって開けていった。わたしは自分が標的でなかったことに安堵しながら、彼らの狼藉に混乱していた。本でもなく、わたしでもないなら、一体こいつらは何をしに来たんだ？

「何なんです？」

勇気を振り絞って出した声は、情けなく震えていた。ついさっきまで反体制の若者の熱い心に同調していたのに、実際にできることと言ったらこんなに無様なのだ。

「どこへ行った！」

軍事警官が吠えた。そこは下宿人の婆さんの部屋だった。部屋の隅に鳥籠があるだけで、あとは据え置きチェストとソファとベッド以外、ほとんど何も物のない部屋だ。

「パドマはどこだ！」

「えっ？」

「パドマはどこだと言っている？」

「パドマ？ え？ ええっ？」

あのばあさんが？ あのうるさい下宿人の婆さんがパドマ？

演技ではなく素で驚いているわたしを見て、舌打ちをして警官たちは部屋を出ると、他の部屋も片っ端から捜査を始めた。見る見るうちに家の中は泥棒が荒し回ったような惨状に陥っていったが、わたしはもう気にしていなかった。さんざん散らかしに散らかした後で、警官たちはパドマが戻って来たら必ず連絡しろと言って出て行った。

わたしは部屋の片付けもせず二階に上がり、下宿人のばあさんの、いやパドマの部屋を覗いた。

「Barack Yea!」とその時、鳥かごの中のオウムが鳴いた。「Barack Yea! Barack Yea! Barack Yea!」

そして思い出した。去年の夏くらいから、あのばあさんが、いまのテレビを独り占めしてアメリカの大統領選挙に夢中になってかじりついていたのを。わたしは知っていたのだ。なぜ80歳のパドマが再びペンをとることにしたのか。

「Barack Yea!」わたしは笑った。「Barack Yea!」

(「Barack Yea!」 ordered by みやた-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

カム・バック2009

<http://p.booklog.jp/book/44277>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44277>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44277>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.